

早魃記念碑

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

錦 帯橋の岩国から下関へと向かう途中の山陽小野田市に、昔話の主人公「三年寝太郎」が造った灌漑取水堰「寝太郎堰」があるという。スケジュールは押していたが、横浜在住の私にはそうそう気軽に行ける場所でもないもので、なんとでも立ち寄ることにした。

新岩国駅から新幹線こだま号で五十分ほどの厚狭駅は、山陽本線と美祢線が接続する駅だが、平成十一年に山陽新幹線の駅としても開業した。この駅を挟んだ広瀬と鴨庄の南北二つの字からなる地域は、「千町ヶ原」とよばれ、寝太郎堰によって美田が拓かれたという。広大な土地が水田となったため、「千町」と名づけられたのだろうが、文久元年（一八六二）の記録では、田数が百町三畝一二歩とあるので、江戸時代末期には約一〇〇畝が水田だったようだ。

現在の厚狭駅南側は、がらんとした駅前ロータリーを囲むように更地が広がり、ぼつぼつと住宅や複合施設らしき建物がみえる開発途上の風景で、千町ヶ原も今後はますます様相を変えていくのに違いない。さて、厚狭駅南側の新幹線口から西へ五〇〇メートルほど歩くと、住宅地に小さな寝太郎荒神社がある。この社は、寝太郎を祭神として祀っているため、「寝太郎舊跡記念碑」などの碑が建てられており、なかで

も昭和十四年（一九三九）の大早魃の際の豊作を記念して建てられた「早魃記念碑」は、寝太郎堰の恩恵を如実に物語っている。

その年は春以来干天が続き、厚狭郡内では植付計画面積六万六千反に対し、植付不能面積が七千反、苗の枯死が四万八千反に達し、六千戸の農家に被害が及んだ。しかし、寝太郎堰の灌漑地域は、そのような早魃をものともせず、二割もの増収を記録したという。約一二畝の石碑には、晴天が続いた日付の後に、「大井手掛ノミ満作」と短くも誇らしげに書かれている。ちなみに「井手」とは井堰のことであり、大井手掛は寝太郎堰の灌漑地域を指す。

実は、この碑は長く行方不明となっていた。『宇部日報』の平成二十三年八月十二日号によると、当時厚狭図書館の館長だった開初茂夫氏が、『山陽町史』に記されている同碑が境内にないことを不審に思い、同年七月の末に神社の周辺を探したところ、片隅に根本から折れ、横倒しになった石碑を発見した。

貴重な資料であるため、地元で石材店を営む村上昭治氏に修復の見積りを依頼すると、村上氏は地元への恩返しだと無償でこれを引き受け、発見から間もない八月十一日に石碑はみごと再建された。本来の仕事の後回しにしたのかと思うほど修復作業が早

く、いかに地域の人びとが、寝太郎に感謝しているのが偲ばれた。錦帯橋でも感じたが、すぐれた土木の仕事は、時代を超えて人びとの身も心も潤し続けるのだ。

しかし、肝心の寝太郎だが、実際は何者なのだろうか。まさか伝説のとおり昔話の主人公が、本当におとぎの国からやってきたわけではあるまい。線路向こう北側の在来線の厚狭駅前にあるという寝太郎の銅像を見に行くことにした。（つづく）



早魃記念碑

[交通]JR厚狭駅南側新幹線口から徒歩約10分

※ 碑文の全文は日建連HPに掲載しています。